

<コマツナ萎黄病>



子苗が立枯れし、欠株となる。



青枯れ状にしおれる。



葉脈に沿って、網目状に黄化、枯死する。

<コマツナ萎黄病>

病原菌：Fusarium oxysporum Schlechtendahl

f. sp. conglutinans (Wollenweber) Snyder et Hansen

1. 症 状

6～9月の高温期に露地及び施設栽培で発生が多い。子苗期には激しい立枯れを生じる。生育中期～後期の株では青枯れ状にしおれ、のち株全体が下葉より黄変、枯死する。秋期に入り、気温が下がると、被害は軽微となり、発病株の下葉は葉脈に沿って、網目状に淡黄色、奇形となり、のち葉全体が黄化し、落葉する。発病株の葉柄、茎、根の維管束部は淡褐色～暗褐色に変色する。

2. 生 態

茎や根部の病組織内の病原菌は土中で耐久体である厚膜胞子として生存すると考えられる。地温や土壤水分などの条件がよくなり、コマツナが作付けされると厚膜胞子は発芽して根部から侵入し発病させる。病原菌の菌糸生育は10～35℃で認められ、適温は22～30℃である。播種から発病までの期間はつやざき小松菜など感受性の高い品種では25℃以上で10日である。

3. 防 除

- 1) 発病株及び残渣はすみやかに除去し、圃場衛生を良好に保つ。
- 2) 発生畑では、せいせん7号小松菜など耐病性品種を栽培する。
- 3) 土壤消毒の効果は高い。

4. 記 事

本病は1987年（昭和62年）7月以降、葛飾区などのコマツナ産地で発生している。